

(様式2)

令和4年度佐賀大学研究者国際交流支援事業報告書

令和5年2月22日

国際交流推進センター長 殿

事業責任者(申請者)

所 属 芸術地域デザイン学部

職 名 准教授

氏 名 三木 悦子

下記のとおり令和4年度佐賀大学研究者国際交流支援事業の実施結果について報告します。

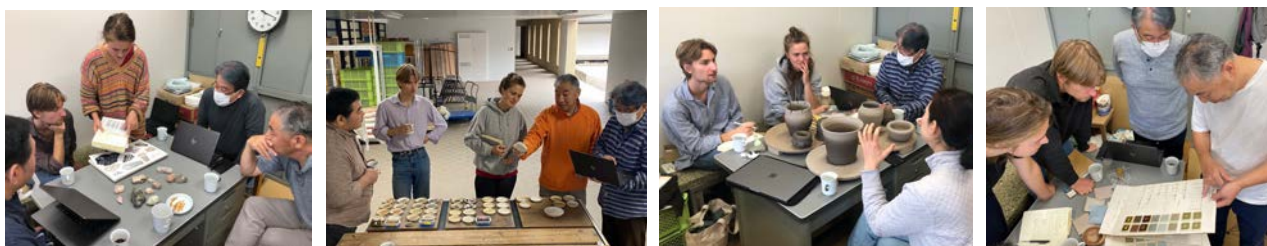
1.国際研究集会名	'SPACE-ARITA'自主研究成果発表会		
2.事業責任者(申請者)	三木悦子,田中右紀, 湯之原淳,甲斐広文	2.事業責任者 (申請者)	三木悦子,田中右紀, 湯之原淳,甲斐広文
4.開催期間	令和5年2月14日		
5.申請区分	C)一般		
6.参加者数 ※参加者名簿(別添)を添 付	参加者数 50名 内、外国人数 7名、研究者数 7名、 学部学生数 22名、修士以上学生数 名		
7.招待講師	所 属 _____ 職 名 _____ 氏 名 _____		
8.支出額	金 額 _____ 円 【内訳】 謝金 24,000 円 旅費 _____ 円 消耗品費 46,000 円		
9.国際研究集会の内容	'SPACE-ARITA'自主研究成果発表会 日時：令和5年2月14日(火)16:30~18:00、その後の作品観覧~19:00 場所：佐賀大学有田キャンパス 講義室1,2 作品展示：茶室、図書室		

交換留学プログラム SPACE-ARITA は、有田キャンパスをベースに、主に陶磁器による表現を専門的に学ぶプログラムである。留学生が個々に立ち上げるメインプロジェクト「自主研究」を軸に、肥前地区の窯業について学ぶフィールドワークである「日本事情研修」に加え、自己の研究内容や興味関心により、佐賀大学で開講される授業を選択し受講することで専門性を高めることができる、ユニークで柔軟なカリキュラムを提供している。留学生は SPACE-ARITA のプログラムの中で、日本人学生や地元の人々との、焼き物を通じた学術的で有意義な交流を通じて、日本の社会や地域の人々への認識や理解を深めることができる。新型コロナウイルスによる影響で3年間途絶えた SPACE-ARITA は今年度秋学期より再開し、オランダのデザインアカデミー・アイントホーヘンより2名の留学生、Mr. Nathan Charles, Jean-Louis Raccah (仏) と Ms. Janneke de Lange (蘭) を受け入れた。10月～2月までの半期を通じた SPACE-ARITA の特徴的な授業である「自主研究」と「日本事情研修 E」は、肥前窯業圏を学びのフィールドとし、窯業従事者や地域の方々と関わる、地域性を活かした専門性の高い授業で、他の大学では学ぶことができない特殊性がある。歴史や文化・風習、思想や教育、制作背景など全く違った背景を持つ彼らが、地域性・専門性の強い「自主研究」や「日本事情研修 E」の成果を地域に公開し、これらの授業を通して得たもの、そこから見出された考え方や表現、制作物を共有して学内や地域・窯業界に還元し、意見交換や交流を行うことで、互いの焼き物の創造活動に刺激を与えることを目的としている。

「日本事情研修 E」



「自主研究」



10.事業実施による成果・今後の事業の発展等

参加者の半数が地域の方々、窯業従事者で、中には作家として活動している卒業生や窯業技術センター職員として、働く卒業生も来ていた。彼らの制作成果や作品、創作表現に驚き、展示空間として利用した茶室や図書室と言った、普段、肥前窯業圏で生産する焼き物の展示場とはかけ離れた空間での表現方法に、非常に興味を持って観覧していた。発表後の質疑応答では窯業従事者からの専門的な質問や、創造の根源に関する質問なども飛び交っていた。また、展示空間では観覧するだけでなく、Nathan や Janneke に話しかけ、質問する場面も多く見られ、積極的な意見交換が行われていた。成果発表会は 18 時で終わったものの、その後の展示観覧は 19 時まで観覧者が残り、関心の大きさが窺えた。

SPACE-ARITA プログラムは陶磁器研究に特化した「自主研究」がその学習時間を大きく占めおり、半期で卒業研究と同等の成果を残している。これまでも SPACE-ARITA 留学生が有田キャンパスで制作した成果が在籍国に帰った後の国際展覧会やデザインウィークなどで発表されている。今後も引き続きそうした成果の残る教育・研究を行なっていくことが重要であると確認できた。

○最終成果発表会の様子

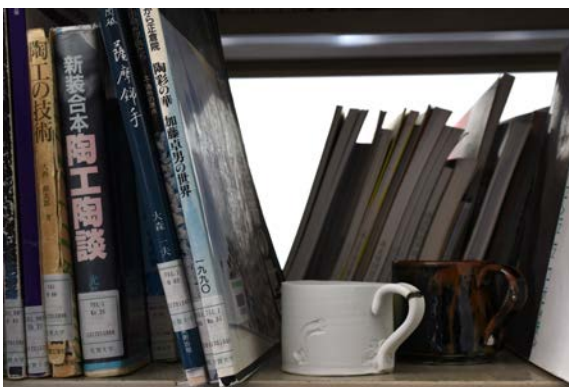


○展覧会場・作品観覧の様子





○作品展示の様子



※欄内に収まらない場合、適宜、行を追加し、ページを増やしていただいても構いません。